



Title	発達支援における「曖昧さ」の価値 : むくどりホームの実践から
Author(s)	伊藤, 一奈; Itoh, Kazuna; 川田, 学 他
Citation	子ども発達臨床研究, 22, 1-12
Issue Date	2025-06-20
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.22.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95724
Type	departmental bulletin paper
File Information	01-18821707_22.pdf



一般論文

発達支援における「曖昧さ」の価値 — むくどりホームの実践から —

伊藤 一奈¹・川田 学²

The Value of “Ambiguity” in Developmental Support — From Attempts to Build Relationships in the Practice at Mukudori-Home —

Kazuna ITOH, Manabu KAWATA

要 旨

本論では、札幌市の地域子育て支援拠点であるむくどりホームの事例から、「他者」とのつながりを保障する場における「発達支援」たるものを考察した。この結果、むくどりホームでは人の成長・発達が、「他者」との関わりの中で偶然生まれる体験によって保障されることが示唆された。したがって「他者」との境界を作りうる閉鎖性に対しては、当事者への「抵抗」ともいえる介入がなされていた。これにより場の出来事や人間関係が不確かなものとなり、本論ではこのような事態を「曖昧さ」と定義した。「曖昧さ」は「他者」の存在を前提とする場が持つ特徴の一つであり、この中に当事者の新たな行動や思考を促し、また、人間関係を築く余地があるものと考えられた。

キーワード：発達支援、地域子育て支援拠点、むくどりホーム、他者の存在、曖昧さ

1. 問 題

(1) 「発達支援」の困難性

小論の目的は「他者」の存在を前提とし、また、人の発達を規定する枠組みを相対化しようとする場においては、何に価値を置き、そこに向かうための支援がどのようになされているのかを検討することである。なお、「発達」と「支援」は切り離せないものであり、「人の発達・成長を支えること」を本論においては「発達支援」と暫定的に

定義する（以降、「」を外す）。以下、目的の背景について詳述する。

北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センターでは、「発達支援学創生研究」という名称のもと、現代において持続可能な人の育ちと、それを支援することの新たな枠組の構築が模索されてきた。2011 年からの 3 か年に渡るシンポジウムでは、発達心理学、社会教育学等、幅広い観点から学際的な議論が行われた。それぞれのテーマは、「遊ぶ・学ぶ・働く：持続可能な

¹ 北海道大学大学院教育学院 修士課程

² 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター 教授

発達支援のために」(2011)、『『生きづらさ』を超えて」(2012)、「Development 概念の転換：支援の背後にある困難性を探求する」(2013)であった。ここから問題として浮かび上がってきたものは、社会が要請する「定型」の枠組みから排除されてしまった、あるいは排除されそうな人々の生きづらさである。それはまた、実現すべき価値として捉えられてきた発達の「転倒性」として理解された。発達の転倒性とは、宮崎（間宮ほか，2014，p.59）によれば「今我々が発達と考えているものは、管理上の必要性から作られた社会的標準」であり、「それが本来のものであるかのように転倒してしまっている」事態である。

人の育ちにおいて、到達すべき枠組みを前提とするならば、宮崎（2024）が述べるように、発達支援は「社会システムの適応支援」（p.28）であって、「逸脱しそうになる人々や逸脱した人」（宮崎，2014b，p.91）をこの枠内に統合することである¹。これは、年齢に応じた能力などといった、社会的に作られたカテゴリに適応することが是とされているからにほかならない。例えば広く保育実践においては、月齢ごとの到達目標としての発達は堅固に維持されており、発達の目安はひとつの枠組みである。したがって、発達の目安を下回る子どもに対しては、個別カリキュラムに組み込むなどして、発達を促し強化することが保育者の目標になる。このような個に対する働きかけは、発達を個体単位的能力と見做しているがゆえである。

今日の発達支援における困難性は、2013年の総括討議の中で川田が指摘しているように「管理的な観点から逆説的に構築された『標準』だったり、『普通』といったものを何か人間本来であるかのように見てしまうことによるがんじがらめ、自縄自縛みたいなもの」²（間宮ほか，2014，p.58）にあるといえる。

（２）新たな価値を創造するためには

個人が統合されるべき枠組みは言い換えれば「こうでなければならない、こうあるべきもの」であり、いわゆる「支援」はそこに向かってなさ

れる。また、この枠組みは「他者」との境界を生むものでもある。現に、社会にはさまざまな排除や分断が存在しており、この事実が「他者」の存在を前提とする人の成長をさらに困難にしているものと思われる。

宮崎（2018）は新自由主義の限界が顕在化し、社会的次元が不安定であることから、人々が存在論的不安定³という事態に陥っているのが現代社会の状況であると述べ、このような社会での自己形成は他者との境界を明確にし、異質な他者を排除することによってなされる「排除型自己形成」としてしている。したがって、新自由主義に支配された現代社会の課題は、宮崎のいう人が育つ領域としての社会的な領域の再建、それによる存在論的安定を図ることである。換言すれば、「他者」の存在を前提として形成される新たな自己と出会う試みでもあるといえる。すなわち、「他者」を排除するのではなく受容することによる自己形成であるといえよう。榊（2017）は日本の子育てと家族・社会の変容を整理した上で、1998年からの状況を「社会の分断」を乗り越える「新しい価値の模索期」としている。今日に至るまでそれが続いているのが現状であろう。つまり、人が成長していく時に大切な価値とは何かが問われ続けているのである。それは、これまで維持されてきた個人が統合されるべき枠組みのオルタナティブとして考えられるものである。

これらを踏まえるならば、「新しい価値」（榊，2017）の創造には「他者」とのつながりが欠かせず、したがって、つながりを保障する場が必要である。しかし、湯浅（2021）が「生きづらさ」は「無縁社会という現実から生まれる感覚」（p.188）と述べるように、現代社会は「他者」とのつながりが希薄な個人化社会である。ゆえに、現代社会における発達支援の役割は、何をおいてもまずは、「他者」⁴とのつながりへの支援にあるのではないだろうか。

（３）雑多な場における発達支援とは

札幌市の地域子育て支援拠点のひとつである、

むくどりホームふれあいの会（以下、むくどりホーム）は、「赤ちゃんからお年寄りまで障がいのある人もない人も、共に集い、違いを認め合いつつ交流」（柴川，2017，p.16）することを目的とする場である。榊（2017）によれば、むくどりホームの大きな意義は、「他者」すなわち異なる価値観と出会い、矛盾や葛藤に直面することが保障される点にある。これらは多様な人々が集う場においてこそ存在するものであろう。

むくどりホームに類似する実践に、例えばこども食堂（湯浅，2021）や異年齢保育（宮里，2013）があげられる。宮里（2013）によると、異年齢保育はヒト、モノ、コトのいろいろなものが入り交じり、きちんとそろわない雑多な場を特徴とした実践である。あえてそろえず、違いを認める。むしろ、そこでこぼこを楽しむところに極意があるという（p.60）。これらの場でなされる発達支援とは、個人が価値ある何かへ適応できるよう支えることではない。ゆえに、「新しい価値」の創造を志向する場であるといえ、「他者」の存在が大きな意味を持つ。では、このような場における人の発達、それを促す「支援」とはどのようなものであろうか。

ここで注意しなければならないのは、むくどりホームの実践や異年齢保育自体が「目的」になると論理が転倒するということである。川田（2019a）が指摘するように、異年齢保育は「結果としての異年齢」（p.63）であって、「実践の『基本的課題』が明確になるからこそ」（同上，p.63）の異年齢である。同様にむくどりホームの実践も「新しい価値」を実現しようとした結果が、多様な人とながらることのできる場の創造であったということだろう。これは「発達の転倒性」問題と通底する。

2. 本論の目的

以上のような議論を踏まえて、本論ではむくどりホームの実践を対象にし、「他者」とのつながりを保障する場では、それ自体がひとつの価値であるものの、何に価値を置き、そこに向かうため

の「支援」がどのようになされているのかを検討する。というのは、むくどりホームの理念である「心のバリアフリー」は、現代社会における様々な境界や分断を乗り越えるものであるが、このような場においての、いわゆる「支援者」の役割や発達支援とはどのような実践であるのか、十分に検討されてきたわけではないためである。本論ではむくどりホームのスタッフの方々による実践の振り返りを考察することを通し、むくどりホームにおける発達支援とは何かを検討する。

3. 方法

むくどりホームでは、およそ1か月ごとに実践の振り返りが行なわれる。振り返りはむくどりホームでの実践が省察される場である。本論ではこの振り返りで語られた内容を分析対象とした。なぜなら、実践の振り返りは主にスタッフの立場およびそれ以外の立場から語られ、むくどりホームのあり様は複数の視点を通して顕在化するためである。

振り返りは毎回2時間、対面またはオンラインで実施された。参加者は常勤スタッフのAさんとBさん、振り返りのメンバーであるむくどりホーム参加者のCさんとDさん、これに第一筆者を加えた5名である。CさんとDさんの立場は後述する。語られた内容は筆記で記録、および参加者全員の同意を得てICレコーダで録音し、文字に起こした。

疑問点や気になった点などは、次の回の振り返りの冒頭や終了時に質問するという形を取った。これまで筆者が振り返りに参加した期間は202●年10月～202▲年3月までの、計6回である。なお、このうち1回分（202▲年1月）は諸事情から筆者は40分のみ参加となった。回ごとに中心となる内容、回を問わず参加者の語りから繰り返し表出される言葉に着目し、その含意するものを検討した。本稿では紙幅の都合上、振り返りの内容全てには言及できないため、なかでも今回の分析に重要であると思われる内容のみを取りあ

げる。

4. 結果と考察

全体を通し、振り返りの中心となる話題は場の出来事に関するものであった。その時のスタッフの気づきや働きかけを振り返ることにより、むくどりホームにおけるスタッフのあり方、および場そのもののあり方が毎回問われた。ここから読み取れるのは、むくどりホームの実践が「むくどりらしさ」とは何かへの問いを志向していることであった。「むくどりらしさ」は、常勤スタッフによって、「曖昧さとすき間」があり「いかにわかりづらいか」に価値が置かれ、「ハテナがいっぱいある」ものとして表現された。本論では、この「むくどりらしさ」を「新しい価値」とであると捉える。

以下では、振り返りの中ではほぼ毎回話題に上った、場の閉鎖性とスタッフのあり方に論点を絞り、閉鎖性を乗り越える方途、およびスタッフのあり方を検討した。なお、語りの部分は内容が変わらないよう留意した上で文の体裁を整え、要点を抜粋した。また、主な発言の末尾に番号を付した。

(1) 閉鎖性⁵を解く

振り返りでは場においての閉鎖性がしばしば問題として取り上げられた。閉鎖性は「他者」との境界を作るものであるといえ、これはむくどりホームの理念に反するものと理解できる。したがって、閉鎖性を解くためにはどうすればいいのか、度々意見が交わされた。以下にエピソードを示す。

エピソード① つながりの遮断(振り返り実施日: 202●.10.3.)

常連のPさんが、お孫さんをリビングに残し、一人で絵本の部屋にこもっていた時の話である。この時の閉鎖性は、場での過ごし方の問題として取り上げられた。(振り返りの中では、以前にも同様なことがあり、Pさんはごく私的な用事で部屋にこもっているのではないかと、という指摘も

あった)。

B: (Pさんが一筆者) 1時間くらい、いなくなるから、って言ってた。(むくどりに来て個室にこもっていることが一筆者) もやっとした。私だけ? 自由にしてもいいんだけど…。閉鎖的に感じた。私はその手のことに目くじらを立てすぎ?

Bさんが上記のように述べたのは、Bさんがひろば⁶は個別に過ごすのではなく、「みんなが混ざる方が、広がった方がいい」し、それが場の良さであるという意味づけていることによる。これに対してCさんとAさんは以下のように述べている。

C: むくどりに来てるからって同じ重さでみんなコミュニケーションを取る必要ないと思う。こもっていたとしても、問題ない。制限を設けると他の子育てサロンと変わらない。(1)

A: Pさんのことよく知ってるから、私だったら(絵本の部屋に一筆者)「何しに行くの?」って聞く。お孫さんを連れて行っちゃう。わざと感はあるけど。むくどりに来てる以上、思った通りにはいかない。(2)

Cさんはむくどりホームが他のひろばと異なる点は、制限がないことであると述べている。制限はひろば利用にあたってのルールともいえ、時として参加者の行動に制約を課す一方で、誰もが安心して過ごすために必要なものであるという解釈もできる。つまり、制限は場の確実性を保障する一つの枠組みでもある。しかし、このような枠組みは「いかにわかりづらいか」に価値を置くむくどりホームには矛盾するものであるといえるだろう。

次に、Cさんの「むくどりに来てるからって同じ重さでみんなコミュニケーションを取る必要ない」(1)という発言は、Cさんにとって、むくどりホームは「家」みたいなものだという認識に基

づく。したがってむくどりホームでの過ごし方について、「家族だとそれぞれ自分のしたいことをやってる。家で家族と過ごすように、同じ空間でそれぞれのことをやっていい」と述べている。対してAさんは「むくどりに来ている以上、思った通りにいかない」(2)という。これらは相反する主張のように思われるが、Cさんは「家族がバラバラに何かしていても、何かあったらねえねえって言える。それがむくどりの魅力」であるとも語っており、「こもって」いる過ごし方を問題ないとしつつも、必ずしも閉鎖性に了解しているわけではないことがわかる。

この出来事における閉鎖性の意味は、意図して他者とのつながりを遮断しているという閉鎖性である(つながりの遮断)。これに対してAさんとCさんは、そこに「入っていく」ことで閉鎖性を解き、つながりを維持しようとする点で共通している。この働きかけによって、物事がどのように変化しうかが不確定になる。Pさんにとっては、まさに「思い通りにいかない」という経験であり、むくどりホームでの過ごし方が予測不可能な曖昧なものとなる。また、Pさんに気を使って何も言えなかったというBさんは「閉鎖性は私にあった」と振り返っている。

エピソード② 「他者」の拒否(振り返り実施日: 202●.10.28.)

次のエピソードは、常連の小学6年生4人が卓球をしていた時のことである。4人は誰も寄せ付けない雰囲気を出しており、それがBさんには引かかった。

B: (卓球を一筆者) そのやってる感じが、すごく嫌な感じがしたの。誰も寄せ付けない、俺らだけでやる、みたいな感じなの。そこでAちゃんが「私も入れてー」って言ったんだけど、無視。だから、これは経験だ、言ってやれっ、て思っただけで私のラケット持って「ちょっと入れて！」って、Q(小学生一筆者)の横で卓球をやり始めました。そしたら非難轟々

で。「この人が入ったせいでおもしろくなくなった」って言ってさ。

C: Bちゃんに？

B: そう。だから、(その場にいた全員に一筆者)「聞いて聞いてー！」って、「私、今すっごく困ってる。こんなことで責められてる」って言って。「どうしたらいい？だって、ここみんなの場所でしょ」って。「みんなの場所なんだから、誰かが入る事だってあるんだし、何でそれが駄目なのさ。みんなどう思う？」みたいな感じで。(3)

小学生たちは、自分たちだけで楽しみたいことから、ひろばの他の参加者を寄せ付けない雰囲気を出していた。同様なことは、別の日の振り返りで“ママ友集団”についても言及された。Aさんは「ママ友集団であまりむくどりのことも知らないけど、何かこう仲間だけで楽しみたいみたいなムード、ごくまれにある」と述べ、その時の雰囲気を落ち着いていられないものとして語った。このような小学生たちやママ友集団は、内集団の凝集性を基にしている。つまり“小学生”、“ママ友”というカテゴリに当てはまり、そこに帰属意識をもつ個人で形成される集団である。しかし、この集団は安心感こそ得られるかもしれないが、外部に対して閉じてしまい、したがって「他者」と出会う機会を逸するという限界がある。この限界に対して、むくどりホームのような「他者」との出会いを保障する場合は、川田(2019b)の言葉を借りれば『『信頼』の中間共同体』(p.210)として、「安心」を基に築かれた集団や個人を「外部」へつなぐ媒介項となる。その時、必要となるのが「他者」に対する「信頼」であるという。「外部」との関わりは不確実性を含むものであるが、「不確実性に対処することによって『おもしろさ』と他者への信頼を経験し」、「『外部』とかかわりをもつことのできる『自己』への信頼を形成していく」(同上, p.217)のである。

内集団の限界を打破する方策としてBさんが取ったのは、やはり「入っていく」こと、それか

ら場の問題を他の参加者に「みんなどう思う？」(3)と投げかけることであった。Bさんは、この時の自身の行動は小学生たちにとっても他の参加者にとっても「思いも寄らない体験だった」と振り返っている。Bさんの行動は場の出来事の見通しを不透明にしているといえるだろう。これに対して小学生たちは「納得はいかない」し「きれいにまとまったわけでは全然ない」(Bさん)のであるが、そのうちの3人はその後、Bさんと共に外でキャッチボールなどをして遊んだという。その場を「きれいにまと」めず、曖昧にしておくこともむくどりホームの特徴であろう。小学生たちにとって、スタッフの介入によって生成された出来事の不確実性は、どのような意味を持つのだろうか。その後の小学生たちの行動から推察すれば、不確実性の中に自らを省察し、納得はいかないけれども「他者」の意見を受け入れる余地が生成されたとはいえないだろうか。

次に、Bさんがその場にいる参加者に問題を投げかけたことは、それぞれが当事者となることを志向するものである。このような当事者性について、Aさんは問題を投げかけることにより「余裕のある他の人たちの解釈」によってエネルギーを吸い取られていた当人（この場合はBさん）が救われ、「みんなで創るっていう感じになる」と語った。これは他の出来事に対しても言及された。

さまざまな問題や出来事に、第三者が異なる解釈を表明することは、物事の違う側面を表面化させる。むくどりホームではそこに価値が置かれ、またそれが「むくどりらしさ」の重要な要素であることが見出される。このことは、権(2018)が「私的で個別的な見方とは異なる視座から何らかの事象や物事が考えられ、その結果として何かが作られるとき」、「公共的な性質、つまりは公共性を持つ」(p.6)と述べていることに関わるものと考えられる。結果として作られる「何か」は「私的な見え方や解釈」とは異なるものであり、むくどりホームでは「みんなで創る」ものを指すといえよう。これは「むくどりらしさ」のひとつであるとも考えられ、ここに、場における「公共性」

が生成されていると解釈できる。齋藤(2000, p.5)は公共性の条件について、第一に「閉域をもたないこと」、第二に「人びとのいづく価値が互いに異質なもの」であり、「複数の価値や意見の〈間〉に生成する空間」であること、第三に公共性においては「人びとの間に生起する出来事への関心(interest)」が成員の統合のメディアであるとしている。むくどりホームは、場で起こる出来事を中心に成り立ち、その場の全員が当事者となることが期待されている。そこに個人それぞれが異なる解釈を表明することで、公共性が実現されている。

ここで、上述のような場の出来事に対し、常勤スタッフが介入することで生まれる不確実な事態を整理しておきたい。①、②の両エピソードでは、「閉鎖性」に対して「入っていく」という介入することにより、当事者の場での過ごし方の見通しが予測不可能なものとなった。これはむくどりホームが価値を置く「曖昧さとすき間」、「いかにわかりづらいか」ということそのものである。本論ではこれらを総称し「曖昧さ」とする。その上で以降、むくどりホームにおける「曖昧さ」とはどのようなものであるのかを検討する。

エピソード③ 固定された関係性（振り返り実施日：202●.12.2.）

「曖昧さ」と「公共性」の実現は以下のエピソードにおいても確認できる。以下は参加者とスタッフの関係性が1対1になることへの警戒感について語られている。

A：(1対1の関係性が一筆者) 時によってなのかそうじゃないのかっていうのが、時々気を付けないと、いわゆる本当に依存っていう形が気が付いたらできちゃって。子どもが泣いたらすぐ行ってくれる人がいて、初期の状態はそれですごくいいと思うの。行った先でどうなるかの部分、Cちゃんは本当に上手い。「どれどれ、おばちゃんかい」って、こっちの広間に言ってから行くから、そのあともそ

の部屋の中心辺りでずっと抱っこしてるんだけど、赤ちゃんが泣いてもみんなで注目して、ずっと抱っこしてる割にはみんなに落としてるっていうのが上手い。みんなのものになる。極力、二人になろうとするラブコールに負けないで、みんなで笑ったり、見守ったりできるように。(4)

C：割り込んでいかないと駄目だね。(5)

A：ある程度ね。時と場合によるから1対1も必要なんだけど、その度合い。だいたいのはみんなで話せるような内容だったりするから。なんでもかんでも個別化しないように。その関係じゃなきゃ駄目みたいになったらその他大勢を育てる、育てるって言ったら変だけど、学び要素っていうか、全くなくなっちゃうんだよね。(6)

Aさんは、時には必要としつつも、参加者と特定のスタッフの関わりが1対1で固定されてしまい「依存」(4)になることを警戒している。それは、参加者とスタッフの立場が対等でなくなることに加え、「育てる」、「学び要素」(6)という言葉にある通り、関係性が固定されてしまうことで、さまざまな「他者」から葛藤や矛盾が得られなくなることへの警戒であろう。Aさんは筆者との雑談の中で、むくどりホームを「ぶつかり合うところ」、「嫌なこともある、むしろあってほしい」と述べていたことがある。他の多くの子育て支援拠点ではこのようなことは通常は避けられることであるだろう。「嫌なこと」とは「思い通りにならない」ことでもある。いわば「抵抗」を加えられることであるともいえる。

加藤(2014)は、思春期における発達支援の文脈ではあるが、子どもに新しい力が出てきたときに周囲から加えられた「抵抗」が、新しい力をさらに伸ばすと述べている(p.39)。むくどりホームの支援観は、加藤のいう「発達を促進するというよりも、どのような抵抗をその時に作ることが重要かという支援観」(p.39)に近いものと考えられるのではないだろうか。というのも、第一に、

むくどりホームでは個人を受容するだけではなく、当事者には「抵抗」と受け取れる介入がなされること、第二にその「抵抗」が個人の発達の契機になっていると考えられる点で、広い意味では加藤の論と共通性があるものと思われるためである。むくどりホームの場合、「割り込んでいく」(5)ことが一種の抵抗を加えることであって、その結果として出来事や関係性に「曖昧さ」が生まれる。この「曖昧さ」の中に当事者の内的対話⁷や新たな行動を発揮できる余地があるものと考えられる。

以上から、閉鎖性に対しては『抵抗』の介入→『曖昧さ』および『公共性』の生成⁸というむくどりホームにおける一つの実践論理が見出される。「他者」とのつながりに何よりも価値を置いていることが、それを基礎づけている。

(2)「むくどりの支援」⁸

①場の見かた(振り返り実施日：202●.10.28.)

むくどりホームの「支援者」の大きな役割は、これまで見てきたように他者とのつながりを保障する点であった。ここで「支援」に対する、むくどりホームに特徴的な向き合い方について触れておきたい。むくどりホームでは「支援者」の役割として、他の多くの支援拠点ではおそらく問題にならないだろうことが、しばしば問題として取り上げられる。以下、振り返りの語りから考察する。

B：私がお母さんのような役割になっていて、みんなの要求に応える存在であって、そういう構図ができていた日があったのね。私が(参加者から一筆者)言われたことに反応して動くことで、本当は違う人が動けば違う経験ができるものを削いじゃってる。(7)

この発言の意味は、参加者に要求されたことに対しBさんが応じることで、参加者の経験を奪ってしまっているということである。しかし、例えば「高い所にある物を取って欲しい」というような参加者からの要求に対して応じることは、スタッフの当然の役割として、多くの支援拠点では

問題にならないのではないだろうか。ところが、ここでは、参加者からの要求にその都度応じることは、人とのつながりを遮断するものとして問題となる。Aさんはしばしば「スタッフ制になって本来のむくどりでなくなかった」との認識を表明するのであるが、「本来のむくどりでなくなかった」ことは、この「スタッフとしての動き」に関わる。「本来のむくどり」とは「その日に来た人が全員スタッフ」(Cさん)であるという“文化”を共有する場である。すなわち、その日出迎えてくれ、自分の言動に応答してくれるのが誰なのか、が不確実であり、さらに自らも「スタッフ」になりうる場なのである。この「曖昧さ」の中で個人は役割を拾い、演じ、偶然関わった人と関係性を築いていく。この一見、“わかりづらい”支援は、「むくどりの支援」として、スタッフ制という“わかりやすい”支援の型に相対するものである。

したがって、Bさんが「スタッフ的な役割」(Bさんの言葉では「お母さんの役割」(7))をしてしまうことは、これまでたびたび、Aさんと議論になったという。Bさんなりに考えた結果の行動であり、Bさんは「スタッフ」としてどう行動すればいいのかわからなくなっていた。そして、このことは「二人だから駄目なんだ」と、常勤スタッフ二人の「限界」として認識されていた。この「限界」を乗り越えるきっかけとなったのが、「場の見かた」の相違への気づきであった。Aさんは「むくどりを上から見取り図のように見ている。ここで、こういうことが起きてスタッフ的な人がこういう動きをしたらこういう風にこの場はなっていくだろう」という見かたであるのに対し、Bさんは「自分の中からこの場所を見て、だから自分はこういう動きをしたらいいのか、ということを考えて動いてきた」のだという。Bさんは、Aさんの場の見かたを理解した時「パツ、て開けた感じ」がし、「それだ、って思って自分の役割がはっきり分かった」と語っている。

Bさんの葛藤は室橋(2014)のいう「支援」と「援助」の間の動揺として理解できる。室橋によれば、『支援』をする者は、社会システムの中で

公的・社会的な役割として、『配慮』をする人たち」(p.52)であるが、「援助」は『公的な』役割というより、『私的な』役割として、人間関係を基盤とした『配慮』(同上, p.52)である。そして『支援』の困難性として出てくるのは、『支援』と『援助』の間で動揺し、立場・役割の違いを克服できない状態」(同上, p.52)としている。Aさんの「見取り図」のような場の見かたは、「お仕事として来ている以上」(Aさん)“スタッフ”として役割を担うものという前提で、「支援」としての配慮を行う見かたであるといえる。対して、Bさんが「自分の内側から」場を見ていた時は、「援助」になっていたのかもしれない。ここに葛藤があったのであろう。とはいえ、Aさんはむくどりホームの運営の形を「組織化したくない」、「分かりやすくすると組織になる」という発言をしており、Aさんも「支援」に対して葛藤があることが読み取れる。むくどりホームにおいて「支援」をめぐるスタッフの葛藤は川田(2022, pp.171-172)の中でも語られている。それらはスタッフと参加者の「線引き」ができることで、「ここに来た人がその日のむくどりを作り上げていく」文化が壊れてしまうことへの警戒として読み取れる。また、「自分の中にある参加者性とスタッフ性が同居」していることによる「自分の不確かさ」、さらにその上で「専門職としてしていた仕事がいかに問題があったか」という点が語られている。

むくどりホームのスタッフの役割について、Bさんが語ったAさんなりの考えは以下のようなことであり、これがある意味「支援」を乗り越えるきっかけとなった共通認識である。

B: Aちゃんが、「ここで私たちが出来ることって何かのプロフェッショナルではないから、出来ることっていったら、ここに来た人がどんな体験をここで出来るか、体験をしてもらうことだよ、いろんな」って言ってくれた。(8)

むしろ「何かのプロフェッショナル」(8)では

ないことが重要なのではないか。湯浅（2021）は、こども食堂の「支援者」の役割について「専門職は向いに座って対面するイメージ。こども食堂の人たちは、隣にいるイメージ」（p.84）だと述べている。これをむくどりホームに当てはめるなら「隣にいるイメージ」は、「支援者」は「支援者」という立場を表に出すことなく、他の参加者と同様に一人の参加者としてその場に埋もれているイメージである。「支援者」としての顔が曖昧になるからこそ、「分かりやすい、この人に聞くべきという人じゃない人との関係」（Aさん）が生まれるのであろう。

②常勤スタッフを支える“宙ぶらりん”な存在（振り返り実施日：202●.12.2.）

最後に、CさんとDさんの立場について述べる。CさんとDさんは常勤スタッフではなく、他の業務を担っているスタッフでもない。昔からのむくどりホームを知っている参加者ではあるが、いつもむくどりホームに居るわけでもない。だが、振り返りには参加する、という存在である。Aさんは、「Cちゃん、Dちゃんみたいな“宙ぶらりん”な存在が必要」だと語っている。その真意は、一つには「むくどりの『来た人が迎える文化』を守るため」である。それには「スタッフ制にした途端それがなくなり、わかりやすくすると組織になる」ことから「本来のむくどり」を守りたいという意図がある。二つ目には、前述したような常勤スタッフ二人の「限界」や煮つまりを解消することにある。間宮（2014, p.45）は、支援者―被支援者の関係性において「二者関係だけでやっているとカタンと倒れてしまうことがある」とし、「もう一人の立場の人がいると三角形が出来て安定する」と述べている。むくどりホームでは、常勤スタッフの二者関係を、CさんとDさんという同一の立場を持つ二人が支えており、安定した三角形を作っているといえるだろう。

Cさん、Dさんは、スタッフではないからこそその視点からむくどりホームを眺めつつも、常勤スタッフ二人の、場に対する考え方や苦労は共有し

ている。AさんはむくどりホームでのCさんの自然な振る舞いを、折に触れて「昔の（スタッフ制になる前の一筆者）むくどりを彷彿とさせている」と述べ、むくどりホームに不可欠な存在としている。Dさんは振り返りでの発言は相対的に少ないものの、しばしば場を乱す存在として話題になる小学生たちのことを、時には涙を流しながら心配し、関わり方を模索している。二人ともスタッフではないながらもむくどりホームのことを大切に思い、本気で向き合っているのである。立場的には「曖昧さ」を維持しながら、常勤スタッフの“味方”でもあるその存在は大きい。

5. 総合考察

本論の目的はむくどりホームの事例から、「他者」とのつながりを保障する場では何に価値を置き、そこに向かう「支援」がどのようになされているのかを検討することであった。その結果、第一に、この場が価値を置いているのは「他者」との関わりの中で偶然生まれる「体験」であると考えられた。ここでは、人の成長・発達が「体験」によって保障されているといえ、したがって「他者」との境界をつくる「閉鎖性」やいわゆる「スタッフ」としての存在が「体験」を阻害するものとして、たびたび議論の対象となった。第二に、場の「閉鎖性」によって閉じられた出来事や関係を、「みんなのものにする」ことが志向されていた。その過程は、当事者にとっては「抵抗」ともいえる介入をし、そこに「曖昧さ」が生み出されていた。むくどりホームの事例においては、「曖昧さ」は「1. 場で起こる出来事が不確実で予測がつかないこと、2. 事象・関係が決まった形をもたないこと」と定義されるだろう。そして、この「曖昧さ」の中に当事者の新たな行動や思考を促し、また、人間関係を築く余地があるものと考えられた。したがって、この点は発達支援における「曖昧さ」の価値であることが示唆される。

発達支援の困難性にみられる「支援」が、個人を到達すべき枠組みに統合する内向きの支援であ

るならば、むくどりホームの「支援」は、枠組みの境界を曖昧にする外向きの支援であると考えられる。そして、ここに公共性が生成される。ただし、「支援者」による介入は、意図して「曖昧さ」を生み出すために行われたものではなく、「むくどりらしさ」を志向して行われたものである。したがって、「曖昧さ」は「むくどりらしさ」を志向することに不可避的に生じるものであると考えられる。最後に、「スタッフ」という明確な立場にある A さん、B さんを支える C さん、D さんという存在が、むくどりホームたるものを維持していく上で欠かせない要素であった。この存在が「曖昧さ」を維持した立場であることは示唆的である。

6. 課題

「曖昧さ」は「むくどりらしさ」を志向する上で不可避的に生じるものであることが示唆されたものの、その「新たな価値」でもある「むくどりらしさ」とは何かを、本論では明確に言語化するには至らなかった。また、「曖昧さ」を手放して善きものとすることは、「発達の転倒性」問題と同じ陥穽に嵌る危険性がある。したがって「曖昧さ」の概念を相対化し、表裏両面から検討する必要があるだろう。

本論における議論は「むくどりホーム」という、ある意味特殊な場が基礎になっている。むくどりホームの実践はいわゆる「支援」を相対化する実践であると考えられ、一般的な発達支援を行う現場からすれば例外的な場であることが推察される。したがって、むくどりホームのような場での「支援」について、その実践を表現する際に「支援」という言葉が果たして適切であるのかどうか、さらに発達支援がこれまでどのように意味づけられ、実践されてきたのかを検討することが必要であろう。また、公共性生成の過程、その意義についても踏み込んだ議論はできなかった。

最後に、上述のような課題を検討するに当たり、むくどりホームにおける実践をさらに相対化する

ことが不可欠である。その上で「新しい価値」を模索する場において、むくどりホームの実践と共通のものが見出されるならば、「むくどりらしさ」を具体的に言語化することが可能になるだろう。以上、まとめて今後の課題としたい。

注

¹ 鈴木（1997）は近代以降の人の発達観について、「人間は生成するのではなく、エコノミーの本来の意味での組成の対象となった」とし、近代的な市民を作ることとは「生まれたばかりの『自然人』を『社会的市民』に作りかえていくこと、加工可能な自然としての人間を近代社会の一部へと制作していくこと」（p.265）だと述べている。要するに個人は、社会システムに適応できるような、等質な「普遍的人間」（同上、p.265）になることが求められている。このような発達観は、宮崎（2014a, p.22）が近代化パラダイムの発達観として指摘する「単系的発展モデル」と接続する。

² 川田（2014）によれば、「能力を個人の獲得物・所有物として理解する方法は、近代的な観念そのもの」（p.8）である。実際には個人が関わる人物、関係性、場などの文脈に応じて個人の引き出される能力は異なる（ex. 湯浅，2021，p.56）。したがって、川田（同上，p.8）が提起するのは「能力の獲得ではなくて、実際にある能力が個人の現実生活の中でどう実現しているのか、社会的・文脈的な『実現の相』で発達を捉える」ことの理論化である。また、近代的な発達観について、「＜場面・関係の固定化→現れの固定化→観察結果の再生産→言説の再生産→場面・関係の固定化を助長する対応＞という収束的なサイクルが現代の教育保育やさまざまな支援現場における『困りごと』の背景の1つなのではないか」（川田，2018，p.98）と指摘している。

³ 現代は多元主義的で不確実な社会である。「自己のアイデンティティが一貫した人生に根ざしたものでなくなり」、「実存的な選択と自己実現に価値を求める個人主義も、人々の不安が増幅する大きな要因となっている」（ヤング，1999，p.49）。また、コミュニティが衰退した現在では、「人々は自分が社会の内部にきちんと埋め込まれているという安心感」（同上，pp.249-250）を得られない事態が生じており、そのような事態をヤングは「存在論的不安定」としている。また、バウマン（2001）は社会や家庭において、個人にとって親しみやすく、永続的なものがなくなっていることを指摘している。

- ⁴ 「他者」との関係性において発達を捉えようとするれば、発達は他者の存在を不可欠とする。現代においてとりわけ関係性の機会が奪われているのは、同年齢集団のような均質化された他者同士ではなく、年齢、世代や役割を超えた多様な人々とのそれであろう。「均質な他者」、「同質な他者」「異質な他者」については、柴川ほか（2017, pp.30-32）で議論されている。
- ⁵ あらかじめ誤解のないように言及すれば、「他者」と積極的には関わらず静かに過ごしていることは「閉鎖性」ではない。例えば、ソファに座って子どもたちの様子をじっと見ていることは、「場」へ参加する一つのあり方である。むくどりホームでは参加者が同じ空間を共有し、誰もがその日を構成する一員となることが志向されている。ゆえに問題になるのは、そこに自ら境界を作ってしまう「閉鎖性」である。
- ⁶ 地域子育て支援拠点として開催している子育てひろば。むくどりホームでは月・火・土の週に3回開催されている。
- ⁷ 齋藤（2021）は、アーレントにしたがって思考を「内的対話」としてとらえ、「思考とはそれ自体ある種の公共的空間である。なぜなら、複数の異質な『自己』が存在するのでなければ対話は成り立ちえないからである。そして、そうした『内的対話』を可能にするのは現実の他者との間の対話である。他者の思考に触れ、それによって現状の思考習慣が動揺するとき、私たちの思考は始まる」（p.26）と述べている。
- ⁸ 筆者がむくどりホームでの支援観について尋ねたときにAさんから出てきた表現である。
- 経, 58 (2), 97-107.
- 川田学 (2019a). 「異年齢」において何を見るか: 発達論への展望 子ども発達臨床研究, 12 (特別号), 55-64.
- 川田学 (2019b). 保育的発達論のはじまり ひとなる書房.
- 川田学 (2022). 子育て支援が直面していること一題 時岡晴美・大久保智生・岡田涼 (編) まちづくりマインド (pp.168-173) 福村出版
- 間宮正幸 (2014). 人間発達援助者の発達を考える: 自己教育の視点から 子ども発達臨床研究, 6 (特別号), 43-48.
- 間宮正幸・石岡丈昇・辻智子・川田学・宮崎隆志・ゲーマン, ジェフリー・加藤弘通・伊藤崇・水野眞佐夫・室橋春光 (2014). 総括討議 子ども発達臨床研究, 6 (特別号), 57-66.
- 宮里六郎 (2013). 異年齢保育から保育を問い返す 現代と保育, 86, 48-64.
- 宮崎隆志 (2014a). 発展概念の転換と地域の思想 子ども発達臨床研究, 6 (特別号), 19-24.
- 宮崎隆志 (2014b). 非「定型化」発達論の存在論的基盤: まとめにかえて 子ども発達臨床研究, 6 (特別号), 91-95.
- 宮崎隆志 (2018). 協働に基づくケア・コミュニティの意義 —排除型自己形成を超えるために— 臨床教育学研究, 6, 20-34.
- 宮崎隆志 (2024). 「限界線」上の実践としての保育 季刊保育問題研究, 329, 14-35.
- 室橋春光 (2014). 発達とは何か: 特別教育の視点から 子ども発達臨床研究, 6 (特別号), 49-53.
- 齋藤純一 (2000). 公共性 岩波書店
- 榊ひとみ (2017). 戦後日本の子育て・子育て支援の社会史 子ども発達臨床研究, 10 (特別号), 109-125.
- 鈴木晶子 (1997). 「発達」の行方 現代思想 11, 264-273.
- 柴川明子 (2017). むくどりホーム・ふれあいの会の生い立ちといま 子ども発達臨床研究, 10 (特別号), 3-17.
- 柴川明子・小林真弓・宮崎隆志・川田学 (2017). 座談会『未完のムクドリ』を探して——多世代多様な場をめぐる対話の記録—— 子ども発達臨床研究, 10 (特別号), 20-49.
- Young, J. (1999). ヤング, ジョック. 青木 秀男・伊藤泰郎・岸政彦・村澤真保呂 (訳) (2007) 排除型社会 洛北出版 (*Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity*, SAGE Publications of London)
- 湯浅誠 (2021). つながり続ける子ども食堂 中央公論新社

文 献

- Bauman, Z. (2001). バウマン, ジグムント奥井智之 (訳) (2017). コミュニティ 安全と自由の戦場 ちくま学芸文庫 (*Community: Seeking Safety in an Insecure World*, Polity Press.)
- 権安理 (2018). 公共的なもの アーレントと戦後日本 作品社.
- 加藤弘通 (2014). 「抵抗」としての発達支援 子ども発達臨床研究, 6 (特別号), 35-41.
- 川田学 (2014). 年齢、獲得、定型 —発達心理学における『発達』の前提となっているもの— 子ども発達臨床研究, 6 (特別号), 7-14.
- 川田学 (2018). 異年齢期カップリングの発達学: <イヤイヤ期>を生み出す関係的力学の考察 小児の精神と神

Abstract

This paper examines “developmental support” in a place that ensures connections with “others” based on the case of Mukudori-Home, a community-based childcare support center, in Sapporo City. The results, suggest that at Mukudori-Home, people’s growth and development are supported by experiences that arise by chance in interactions with “others”. Therefore, interventions, which may be regarded as “resistance” to the closedness that could create boundaries with “others”, were carried out for the people involved. This makes the events and relationships in a place uncertain, and this paper defined such a situation “ambiguity”. We considered “ambiguity” is one of the characteristics of a place that presupposes the presence of “others”, and in this ambiguity, there is room for new actions and thoughts by the people involved and for building human relationships.

Key Words : developmental support, community-based childcare support center, Mukudori-Home, presence of others, ambiguity